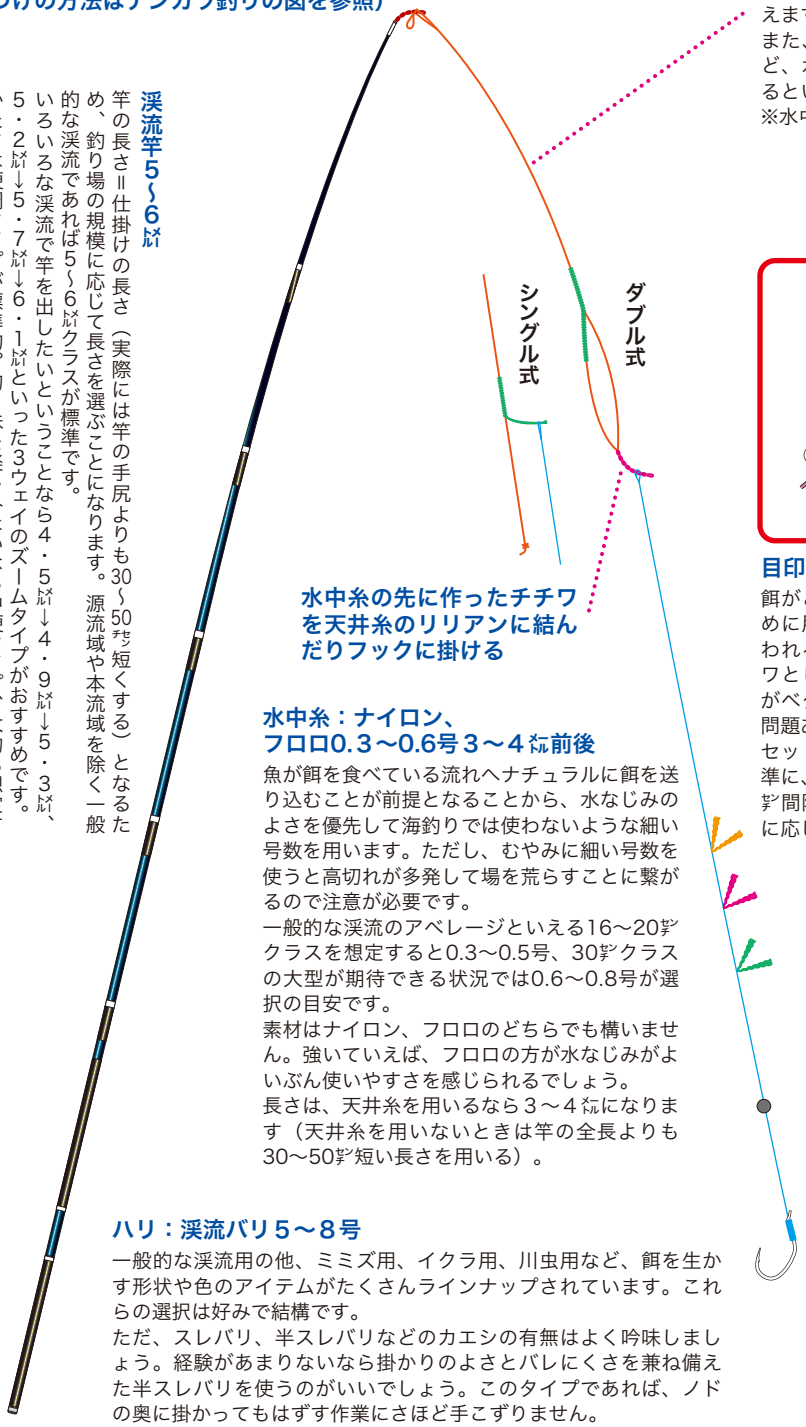
①ミャク釣りスタイル

シーズンを通して活躍する最もスタンダードなスタイルです。この釣り方のコツは渓魚が居つく底流れに餌を届けること。それがうまくいくように仕掛けをセッティングすれば、めぼしいポイントごとにアタリが続くことも珍しくありません。



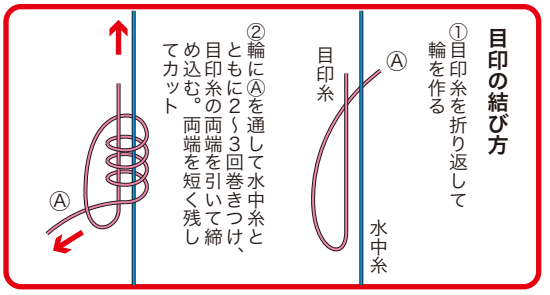
穂先と天井糸はぶしょうづけで接続（ぶしょうづけの方法はテンカラ釣りの図を参照）

渓流竿5～6㍍

竿の長さ＝仕掛けの長さ（実際には竿の手尻よりも30～50㌢短くする）となるため、釣り場の規模に応じて長さを選ぶことになります。源流域や本流域を除く一般的な渓流であれば5～6㍍クラスが標準です。
いろいろな渓流で竿を出したいということなら4・5㍍→4・9㍍→5・3㍍、5・2㍍→5・7㍍→6・1㍍といった3ウェイのズームタイプがおすすめです。かたさは硬調タイプが標準的。釣り味を楽しみたいなら中硬タイプ、大物も想定するなら超硬タイプという具合に目的に応じて選びましょう。

天井糸：ナイロン0.6～1号2㍍前後

竿のズーム機能を活用するときや、釣り場のロケーションに合わせて仕掛けの長さをかえたいときに、その都度仕掛けを作り直すのは面倒です。そのわずらわしさをクリアするために用いるのが編みつけ部分を移動させることで仕掛けの全長を自在にかえられる移動式の天井糸です。
移動式のパターンはダブルとシングル（吹き流し）の２通り。ダブル式はより長いラインを使えることから幅広い調整が可能、シングル式はシンプルでトラブルが少ないという特徴があります。ズームタイプの竿を使うにしても、長くて１㍍ほどの延長であるためシングル式で十分にまかなえます。
また、魚にハリを飲まれた際にカットを余儀なくされるなど、水中糸がしだいに短くなるケースにも瞬時に対応できるというメリットがあります。
※水中糸を竿に直結するときは不要です



目印３個（間隔は10～15㌢）

餌がどの層を流れているかを把握したり、アタリをとるために用いることから視認性の高さが求められます。主に使われるのはグリーンやピンクといった蛍光カラーのフワフワとした毛糸タイプです。風の影響を考慮すると数は３個がベターですが、深い淵などを攻めるなら数を増やしても問題ありません。
セットする位置は、水面より10～15㌢上という最下部を基準に、仕掛けがやや深く入っても視認できるように10～15㌢間隔とするのが一般的です。もちろん、ポイントの水深に応じてこまめにかえる必要があります。

水中糸の先に作ったチチワを天井糸のリリアンに結んだりフックに掛ける

水中糸：ナイロン、フロロ0.3～0.6号３～４㍍前後

魚が餌を食べている流れへナチュラルに餌を送り込むことが前提となることから、水なじみのよさを優先して海釣りでは使わないような細い号数を用います。ただし、むやみに細い号数を使うと高切れが多発して場を荒らすことに繋がるので注意が必要です。
一般的な渓流のアベレージといえる16～20㌢クラスを想定すると0.3～0.5号、30㌢クラスの大型が期待できる状況では0.6～0.8号が選択の目安です。
素材はナイロン、フロロのどちらでも構いません。強いていえば、フロロの方が水なじみがよいぶん使いやすさを感じられるでしょう。
長さは、天井糸を用いるなら３～４㍍になります（天井糸を用いないときは竿の全長よりも30～50㌢短い長さを用いる）。

ガン玉Ｂ～Ｇ５

複雑な流れを釣りこなすにはなくてはならないアイテムです。水深と流れの強弱を考慮し、狙いのポイントへ仕掛けがきちんとなじむ最低限の重さを選びます。たいていの渓流ではＢ～Ｇ５を用意していれば、ある程度の状況に対応できます。
狙いのポイントに適した重さは、実際に仕掛けを流して判断するのが手っ取り早いです。その際、狙いのスポットでなじむであろう最小のオモリからスタートします。それで、視認できる流れと同じように目印が動けば、底の流れをとらえていないと考えられるのでオモリを重くしましょう。こうして軽いオモリから順に使えば、魚がつく底流れを荒らさずに済みます。打つ位置はハリ上20～30㌢が基本です。
なお、オモリは頻繁に交換するため、開閉が容易でラインの保護が期待できるゴム張りタイプやゴム素材でコーティングされたタイプを使用するのがおすすめです。

ハリ：渓流バリ５～８号

一般的な渓流用の他、ミミズ用、イクラ用、川虫用など、餌を生かす形状や色のアイテムがたくさんラインナップされています。これらの選択は好みで結構です。
ただ、スレバリ、半スレバリなどのカエシの有無はよく吟味しましょう。経験があまりないなら掛かりのよさとバレにくさを兼ね備えた半スレバリを使うのがいいでしょう。このタイプであれば、ノドの奥に掛かってもはずす作業にさほど手こずりません。